JAFスポーツWEB

2019 鈴鹿クラブマンレースFinal Round［JAF公認No.2019-3004］

開催日：2019年12月7～8日　開催場所：鈴鹿サーキット　格式：準国内　主催：KRHC［クラブ登録No.加盟26001］、SMSC［クラブ登録No.公認24001］

フォト／吉見幸夫、遠藤樹弥　レポート／はた☆なおゆき、JAFスポーツ編集部

47台がエントリーしたスーパーFJ日本一決定戦。全国各地のサーキットで戦ってきた選手が集まり、熱戦が繰り広げられた。

スーパーFJ日本一に輝いたのは鈴鹿シリーズ2位の岩佐歩夢選手

2019年の鈴鹿サーキットの締めくくりとなるレースが、12月7～8日に「鈴鹿クラブマンレースFinal Round／スーパーFJ & F4日本一決定戦」として開催された。総参加台数は243台と、いずれのクラスも活況を呈していた。

スーパーFJ日本一決定戦のエントリーは47台。これはスーパーFJ単独で競われるようになって最多で、グリッド数も50に増やされたことから、全員がファイナル進出を許されることとなった。レースは恒例のトーナメント方式で、予選、第1レグともAグループではもてぎシリーズ2位の伊東黎明選手、Bグループでは鈴鹿シリーズ2位の岩佐歩夢選手がトップ。いずれも予選では低い温度にしっかり対処し、最終ラップにベストタイムを記録した。伊東選手は追いすがる岡本大地選手を振り切って、岩佐選手は好スタートを切った元嶋成弥選手の、シフトミスに乗じた逆転としていた。

その第1レグでのアベレージに競り勝ったことから、伊東選手がポールポジションを獲得し、Aグループ勢がアウト側に並び、Bグループ勢がイン側に並ぶこととなったファイナル。注目のスタートを誰より上手く決めたのが、2列目から飛び出した岡本選手で、一躍トップに躍り出る。逆に伊東選手は出遅れ、岩佐選手と元嶋選手に次ぐ4番手に後退してしまう。そして、そのオープニングラップではバックストレートで3台が接触！　2周目に入ったところでセーフティカーが導入され、間もなく赤旗に切り替えられる。

だが、戻ってきた集団の先頭に、岡本選手がいない。燃料系のトラブルでエンジンが止まってしまったためだ。SCスタートでレースは再開され、トップは岩佐選手。その背後でいきなりレースが動く。伊東選手が1コーナーで元嶋

スーパーFJ／**1.**優勝の岩佐歩夢選手。**2.**澤龍之介選手は2位。**3.**3位の入山翔選手。**4.**表彰の皆さん。

F4 ／ **5.**2位の佐藤蓮選手。**6.**大草りき選手は3位。**7.**優勝の太田格之進選手。**8.**入榮秀謙選手はHクラスで1位。**9.**Hクラス2位の今田信宏選手。**10.**表彰の皆さん。**11.**Hクラス表彰の皆さん。

選手をかわすも、続く2コーナーで痛恨のスピン。その脇をすり抜けて2番手に躍り出たのが、澤龍之介選手だった。第1レグまで苦戦を強いられていた鈴鹿チャンピオンは、ファイナルになって温度が上昇、リズムを完全に取り戻していた。当初は1秒半あった差を徐々に詰め、ラスト3周で完全に岩佐選手の背後に。

最終ラップのスプーンで、ついに澤選手がトップに立つ。が、岩佐選手も再逆転を諦めず。130Rは黄旗が振られ、追い抜き不能。ならばと、ラストチャンスのシケインに賭け、わずかに開けた澤選手のインに飛び込んだ。そして逆転に成功！　2019年のスーパーFJ日本一の座を、岩佐選手が射留めることとなった。

「きっちりバトルして、勝てたのはすごく嬉しいですね！」と岩佐選手。その後方では入山翔選手と元嶋選手、中村賢明選手が、終始コンマ差でのバトルを繰り広げたが、最後まで隙を見せなかった入山選手が3位を獲得。伊東選手は12番手から8位まで順位を上げるのが精いっぱいだった。

FIA-F4で優勝を独占したHFDP勢が3人揃って出場したF4日本一決定戦は、太田格之進選手がポールポジションを獲得。三宅淳詞選手は5番手で、佐藤蓮選手はドライブシャフト破損で長らくピットでの修復を強いられるも、途中の赤旗中断が幸いし、ラスト1周だけアタックを許され4番手につけた。セミファイナルでは予選2番手の大草りき選手が好スタートを決め、太田選手、佐藤選手を従えるも、6周目のシケインで痛恨のシフトミス。1コーナーで太田選手にかわされ、佐藤選手こそ抑えたものの、悔しい2位になった。

ファイナルでは今度は太田選手がスタートを決め、トップからの発進。大草選手と佐藤選手が詰め寄ったものの、それも2周目まで。4周目に佐藤選手と大草選手が順位を入れ替える間に差を広げた太田選手は、そのままアクセルを踏み込み続け、ラスト3周はファステストラップの連発で逃げ切ることに成功した。

「(佐藤選手が)2位になってから、確か1周だけ追いつかれて、その時はちょっと上げないといけないと思ったんですが、最終的には離せたので良かったです」と太田選手。4位は三宅選手で、チャンピオンの徳升公平選手はセミファイナルのクラッシュにより、最後尾スタートを強いられたものの、追い上げて8位でゴール。

ツーリングカー地方選手権として争われるFIT 1.5チャレンジカップは、ポイントリーダーの伊藤裕士選手がポールポジション。悲願の初タイトルに一歩近づいたはずが、トップ走行中の4周目に後続車両の追突を受け、無念のリタイアを喫してしまう。代わってトップに躍り出たHIROBON選手が、寺西玲央選手の猛追を振り切り、3連覇を確定するも、「気持ちよく終われなかった」とは伊藤選手の心境を慮ってのことだろう。

フォーミュラEnjoy ／ **12.** FE2クラス優勝は大崎達也選手。**13.**阪直純選手がFE2クラス2位。**14.** FE2クラス3位は辰巳秀一選手。**15.** FE2クラス表彰の皆さん。**16.**富永明選手がFE1クラス優勝。**17.** FE1クラス2位は安橋徹選手。**18.**ryuu mao選手がFE1クラス3位。**19.**FE1クラス表彰の皆さん。

20.RS優勝の阿部博行選手。**21.**CS2優勝の金久憲司選手。**22.**RSで2位の板津一平選手。**23.**CS2で3位の水本吉則選手。**24.**クラブマンスポーツ3位の中里紀夫選手。**25.**FFチャレンジ3位の坂和晃選手。**26.**N-ONE OWNER'S CUP3位の楠井義則選手。**27.**FIT1.5チャレンジカップ3位の太田侑弥選手。**28.**クラブマンスポーツ優勝の眞田拓海選手。**29.**FFチャレンジ優勝の林大輔選手。**30.**CS2で2位のBenson Lin選手。**31.**クラブマンスポーツ2位の山谷直樹選手。**32.**FFチャレンジ2位の武田泰一選手。**33.**N-ONE OWNER'S CUP2位の阿久津敏寿選手。**34.**FIT1.5チャレンジカップ2位の寺西玲央選手。**35.**N-ONE OWNER'S CUP優勝の西郷倫規選手。**36.**FIT1.5チャレンジカップ優勝のHIROBON選手。**37.**RS表彰の皆さん。**38.**CS2表彰の皆さん。**39.**クラブマンスポーツ表彰の皆さん。**40.**FFチャレンジ表彰の皆さん。**41.**N-ONE OWNER'S CUP表彰の皆さん。**42.**FIT1.5チャレンジカップ表彰の皆さん。

今大会最多の50台を集めたN-ONE OWNER'S CUPは、西郷倫規選手がポールを獲得し、決勝では岩間浩一選手と阿久津敏寿選手を相手に、激しいトップ争いを繰り広げた。

「今日は予選ありきでした。前だけ見て走りました」と語った西郷選手が優勝、チャンピオンを確定した。

RSは阿部博行選手がポール・トゥ・ウィン。3連勝を飾ってチャンピオンに輝いた。混走のCS2はチャンピオンを争っていた大文字賢浩選手と松本吉章選手が、トップ争いの最中に接触、さらにもう1台が巻き込まれ、リタイアを喫してしまう。このアクシデントを巧みに回避した、金久憲司選手が「2001年のF4以来」となる優勝を飾ることとなった。チャンピオンは大文字選手に確定した。

クラブマンスポーツは、伊藤直登選手がレコードタイムを更新してポールを獲得。コンマ07秒差で眞田拓海選手が続いた。決勝では眞田選手がスタートに出遅れ、山谷直樹選手に次ぐ3番手に後退。伊藤選手はトップで1コーナーに飛び込んでいったものの、後続の2台を振り切るまでには至らず。一方、眞田選手は2周目のスプーンでまずは山谷選手をかわし、続いて伊藤選手にも襲いかかる。眞田選手は4周目のバックストレートで待望のトップに立つと、そのまま逃げ続けて3勝目をマーク。

「スタートが毎回決まらないんですけど、挽回できて良かったです。トップに立ってからは差も広げられたし、自分の中でも自信に繋げられたと思います」と眞田選手。だが、タイトル獲得には一歩及ばず。予選9番手から怒涛の追い上げを見せた中里紀夫選手が3位でゴールし、2連覇を確定。3位は山谷選手が獲得し、エンジン不調を抱えた伊藤選手は4位に甘んじた。

FFチャレンジでは、すでにチャンピオンを確定させている武田泰一選手が、予選でエンジントラブルに見舞われ、最後尾スタートを強いられることに。

「計測2周でタイムを出せるよう、しっかり合わせて。けっこう台数多い中、クリア取れたのが大きかったですね」と語る林陽介選手がポールを奪い、初優勝を目指したものの、なんと1周目のシケインでチームメイトに追突されて、大きく順位を落としてしまう。間一髪のところで回避して、トップに立ったのは林大輔選手だった。一時は4秒半のリードを築いていたが、ラスト2周で詰めてきた一台が。それが武田選手で、逆転には及ばなかったが、まさに意地と貫禄を見せることとなった。兄に代わって初優勝を射止めた林大輔選手は「この前、もてぎの最終戦に出て、技の幅が広がった感じです。嬉しいんですが、前のふたりがもっと冷静にやってくれれば、みんなで表彰台に上がれたので、ちょっと残念です」と、ぽろり本音も漏れていた。

フォーミュラEnjoyはFE1とFE2の混走となるレースだが、このうち旧型のFE1にとっては今回がラストレースとなる。FE2のポールは、ここまで全勝の大崎達也選手が獲得。コースレコードをも更新した速さは、決勝でもそのまま発揮され、後続の激しいバトルを尻目に6周目までに5秒以上の差をつけた。その周のシケインでスピンして止まった車両があったため、ラスト2周はセーフティカーの先導のまま終了となったが、大崎選手が完全勝利を、そして2018年のFE1と併せ、11連勝を飾った。

「皆さん、速いので気持ちを常に、前へ前へと向けていたのが良かったのかもしれません」と大崎選手。そしてFE1は目まぐるしくトップが入れ替わったものの、最後に笑ったのはクラス予選トップからスタートした富永明選手だった。